体育専攻学生におけるスポーツ価値意識の変容に関する研究

浅 沼 道 成*

The Change of Sport Attitudes among Students of Physical Education Courses

Mithinari ASANMA*

Abstract

The purpse of this study is to clarify the change of sport attitudes amang students of physical education courses. The objects were Freshman and Junior of K-Institute from 1989-1991. This study was analyed on Uesugi's four typese; Leisure-Type, Recreational-Type, Agon-Type and Asceticism-Type.

The results are summarized as follows:

1. There were the simmilar pattern of Spot-Attitudes between Freshman and Junior.
2. The Sprt-Attitudes of Junior (1991) changed from those of Freshman (1989) during the twe academic year. Particulrly, their ascetial attitudes obviously depreciated.

KEY WORDS: *Sport Attitude, Student of Physical Education Course, Change*

はじめに

現代社会において人々のスポーツに対する関わり方が見るスポーツ，競技スポーツ，レジャー・スポーツなどと多様化してきている。この現象は社会の変化にともない人々のスポーツに対する態度や価値が変容してきたことにともなうと考えられる。

そこでスポーツを文化的側面から捉えれば，スポーツはスポーツに対する価値意識（スポーツ観），スポーツのマナーやルール（スポーツ規範），スポーツの技術・戦術（スポーツ技術）および施設・用具（物的用具）が相互に規定し合っている関係にある[7]。その中でスポーツ観は「スポーツの意味や価値に関する観念であり，スポーツの存在を意味づけ，その価値を明示し，人間と社会に対するスポーツの意義を定義することによってスポーツの正当性を主張し，説明するもの[8]」であり，より安定的でスポーツ文化の中核を占めるものである。よって，スポーツ集団や組織におけるスポーツ観

＊鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

を明らかにすれば，その集団や組織における成員のスポーツに対する関わり方が予測できると考えられる。

この立場から筆者ら[9]は体育専攻学生の競技力向上の可能性について検討してきた。その過程の中で本研究はスポーツ価値意識に対する基礎的検討という位置にある。

上杉[2)3)]は「禁欲性－即時性」と「自己目的性－手段性」の価値志向の２軸からスポーツ価値意識の４類型［アゴン型（禁欲性＋自己目的性），世俗内禁欲型（禁欲性＋手段性），レクリエーション型（即時性＋手段性），レジャー型（即時性＋自己目的性）］を提示し，大学生や体育教師のスポーツ価値意識を林の数量化Ⅲ類によってパターン分析している。その結果，大学生では「世俗内禁欲型」と「レジャー型」が，体育教師では一元的に「世俗内禁欲型」が抽出された。また筆者[1]は体育専攻学生について上杉の方法を援用して「世俗内禁欲型」とパターン力は弱いが「レジャー型」を抽出した。さらに体育専攻学生の１年生と３年生の間に抽出された価値意識の強さに異なる傾向がみられたことを報告した。すなわち，１年生より３年生において「世俗内禁欲型」の価値意識に低い傾向がみられた。

よってこの傾向が経時的に１年生から３年生へと学年が進むに連れて現象する傾向なのか，あるいは調査したその年（1989年）の傾向なのか明確に解釈できなかった。そこで本研究では事例的研究ではあるが体育専攻学生におけるスポーツ価値意識の変容について縦断的に検討した。

Table 1 Characterristics of the sample

		性		入学方法	
		M	W	推薦	一般
1989	1（n＝133）	95	38	55	78
	3（n＝ 92）	64	28	37	55
1990	1（n＝145）	109	36	66	79
	3（n＝102）	73	38	48	63
1991	1（n＝124）	95	29	56	67
	3（n＝101）	71	30	46	55

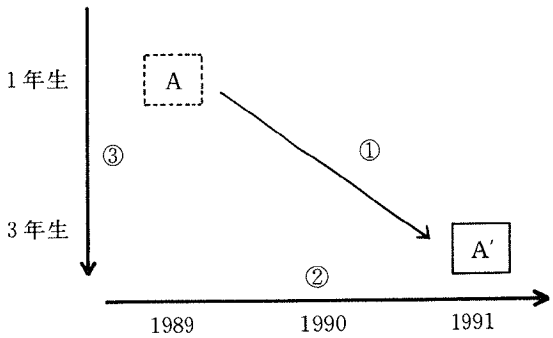

Fig. 1 Procedure

研究の方法

１．データ

1989年に実施された質問紙法による「体育専攻学生の生活実態とスポーツ意識について」という調査データの一部と同じ質問紙を使用して，1990年５月と1991年５月（１年生については８月）に国立のＫ体育大学の新入生（１年生）と３年生に調査したデータの一部を使用した。

データの内容は「禁欲性」「即時性」「自己目的性」「手段性」の４つの志向性に関するそれぞれ３つの質問項目（注１）に対して５－「強くそう思う」，４－「そう思う」，３－「どちらとも言えない」，２－「そう思わない」，１－「全くそう思わない」の５段階で答えてもらったものである。

またサンプルはTable 1の通りである。

２．分析の方法

１．分析の手順

分析はFig. 1に示したように1989年，1990年，1991年のＫ体育大学の１年生と３年生に対して以下の３つの手順で分析・検討をした（注２）。

①1989年－１年生と1991年－３年生，すなわち同じ母集団を経時的に比較検討する。

②各年度ごとに１年生と３年生を比較検討する。

③３年間における１年生と３年生のそれぞれの学年の傾向を検討する。

特に本研究では①における検討が中心であり，②と③はそれを補足する方向で検討を加えた。また，それぞれの１年生と３年生の比較では性（男－

女)，入学方法（推薦－一般）の属性からも検討した。

尚，1989年－1年生と1991年－3年生の集団のサンプルは同じ母集団であるがサンプル数からわかるように完全に縦断してはいない。しかし，本研究では縦断的に解釈した。

2．スポーツ価値意識

一般に人々のスポーツに対する態度や価値意識は多様化してきている[5)6)]。また体育・スポーツに携わっている人々の中でも同様の傾向がみられる[4)]。しかし，本研究では特に競技スポーツを意識し，体育専攻学生における競技力向上の可能性の検討という視角からスポーツ価値意識を捉えている。そのためにスポーツ価値意識を様々なスポーツ集団と比較・検討するために同じ類型的なモデルを利用することが有効な方法であると考えた。よって，本研究でも上杉のスポーツ価値意識の4類型を採用した。

そこでそれぞれの価値意識を構成する2つの志向性に対して「強くそう思う」「そう思う」と答えた肯定群について1点を与え，その合計得点によってスポーツ価値意識の尺度とした。例えば，「アゴン型」の場合，「禁欲性」の3項目と「自己目的性」の3項目の質問に対して何点かということでこの価値意識を合成得点化した。よって，合成得点が6点に近づくほど明確な価値意識を持っていると判断した。

また，それぞれの価値意識の検討において補足的にそれぞれの価値意識を構成している志向性からも検討を加えた。この場合，それぞれの志向性の3つの質問に対して5段階で答えてもらったその得点の合計の平均値を指標とした。

結果及び考察

1．縦断的分析

Fig.2は1989年－1年生時の価値意識とその2年間の大学生活を送った後の1991年－3年生となった時の価値意識を比較した図である。この図から，はじめに1年生時と3年生時において「世俗内禁欲型」の価値意識の平均点が5点近く（S.Dがそれぞれ1.396と1.403）を示し，K体育大学において「世俗内禁欲型」が相対的にかなり有力な価値意識であることが示された。つぎに1年生時と3年生時を比較すると，3年生時の方が相対的に「アゴン型」「世俗内禁欲型」に低下の傾向，「レジャー型」に上昇の傾向がみられた。特に「世俗内禁欲型」で，T検定によれば，P＝0.072と有意な差の傾向がみられた。すなわち，有力な価値意識である「世俗内禁欲型」だけが明確に1年生時よりも3年生時において低下の傾向を示しているといえた。また，「アゴン型」の低下や「レジャー型」の

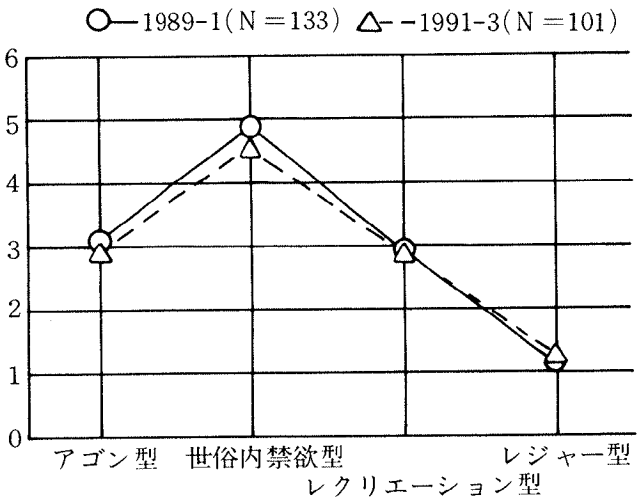

Fig.2 Sport - attitudes ; 1989 - 1 : 1991 - 3

Table 2 Sport - attitudes 1989 - 1 : 1991 - 3

		アゴン型	世俗内禁欲型	レクリエーション型	レジャー型
男子	1989-1（N＝95）	3.168	4.768	2.916	1.316
	1991-3（N＝71）	3.070	4.662	2.845	1.254
女子	1989-1（N＝38）	3.053	5.184 *	2.921	0.789
	1991-3（N＝30）	2.633	4.300 *	3.000	1.333
推薦	1989-1（N＝55）	3.000	4.927	2.800	0.873
	1991-3（N＝46）	2.978	4.935	3.022	1.065
一般	1989-1（N＝78）	3.231	4.859 *	3.000	1.372
	1991-3（N＝55）	2.909	4.236	2.782	1.455

** P＜0.01　* P＜0.05

Table 3 Value - orientation 1989 - 1 : 1991 - 3

		禁欲性	即時性	自己目的性	手段性
男子	1989-1（N＝95）	4.102	2.470	2.772	4.070
	1991-3（N＝71）	4.056	2.451	2.667	3.953
女子	1989-1（N＝38）	4.316 *	2.263 *	2.430 *	4.219
	1991-3（N＝30）	3.700 *	2.656	2.767	4.022
推薦	1989-1（N＝55）	4.267	2.273	2.491	4.152
	1991-3（N＝46）	4.145	2.391	2.529	4.116
一般	1989-1（N＝78）	4.090 *	2.509 *	2.803	4.085 *
	1991-3（N＝55）	3.788	2.612	2.836	3.855 *

** P＜0.01　* P＜0.05

上昇の傾向からも，相対的に1年生時の平均的価値意識が3年生時の平均的価値意識と異なっていることがわかった。すなわち，入学時から3年生に至る大学生活全般の過程においてこの集団の価値意識が変容してきたと考えられた。

Table2は男女及び入学方法から比較した表である。「世俗内禁欲型」において女子と一般入学者の3年生時にそれぞれ1％，5％水準で有意な差（低下の傾向）がみられた。すなわち，女子と一般入学者において「世俗内禁欲型」の価値意識が3年生時に低下している傾向があることがわかった。これは全体における3年生時の「世俗内禁欲型」の価値意識の低下の傾向が，女子と一般入学者という属性を持った学生の低下の傾向に大きく影響されているものと考えられる。そのほかにも有意な差ではないが，特に女子の3年生時にも「アゴン型」の低下，「レジャー型」の上昇の傾向がみられた。また，一般入学者の3年生時に「アゴン型」「レクリエーション型」の低下，推薦入学者において「レクリエーション型」の上昇の傾向がみられる。

またこれらの傾向を説明するために，Table3の志向性レベルから検討をした。この表から女子において「禁欲性」の志向に1％水準で有意な差（3年生時に低下）と「即時性」「自己目的性」の志向に5％水準で有意な差（3年生時に上昇）の傾向がみられた。これは明確に「レジャー型」の価値意識の上昇を意味していると考えられる。また，顕著な「禁欲性」志向の低下は「世俗内禁欲型」の価値意識の低下に大きな影響を与えているものと考えられた。すなわち，この3年生の女子では1年生の時よりも，スポーツに対して禁欲的な態度で取り組むという姿勢が薄れてきていると言い替えられるだろう。また，一般入学者において「禁

欲性」「手段性」の志向に5％水準で有意な差（3年生時に低下）と「即時性」の志向に5％水準で有意な差（3年生時に上昇）の傾向がみられた。この傾向も一般入学者の「世俗内禁欲型」の価値意識の3年生時における低下を裏付けるものであり，「即時性」の上昇は顕著ではないが「レジャー型」の価値意識の上昇を支えているものと考えられる。

2．3年間における1年生と3年生の比較

Fig.3, 4は3年間における1年生と3年生の価値意識のパターンを比較した図である。各年の1年生と3年生において多少の数値的ずれはみられるが，同じ傾向の価値意識のパターンを示している。また，1年生において「世俗内禁欲型」と「レジャー型」の価値意識に違いがみられ，特に1989年と1990年に有意な差の傾向がみられた。すなわち，3年間の中で1990年の1年生に「世俗内禁欲型」の価値意識が最も高く，「レジャー型」の価値意識が最も低い傾向にあった。

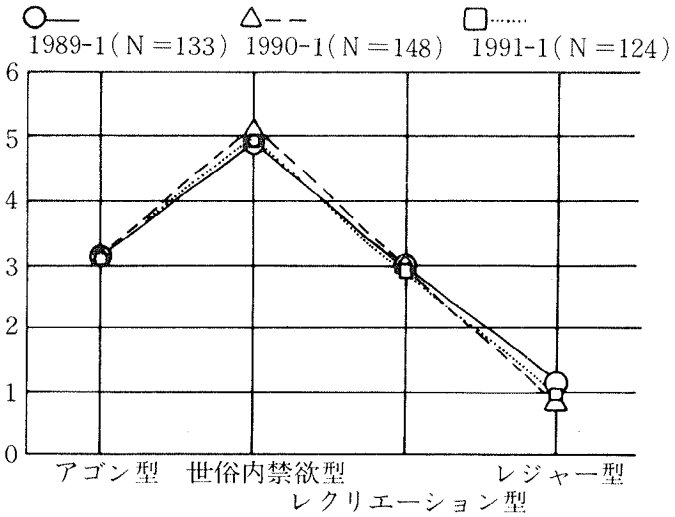

Fig. 3 Sport - attitudes ; Freshman

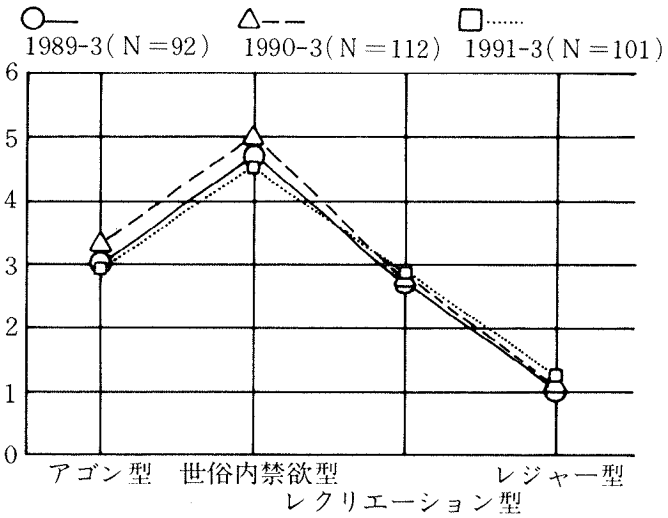

Fig. 4 Sport - attitudes ; Junior

つぎに，3年生において「アゴン型」と「世俗内禁欲型」の価値意識に違いがみられ，特に1990年と1991年に1％水準で有意な差（1991年が低い傾向）がみられた。すなわち，3年間の中で特に1990年の3年生において「アゴン型」と「世俗内禁欲型」の価値意識が最も顕著に高いことがわかった。

以上の結果より，3年間における1年生，3年生という属性集団の価値意識は年度に関わりなく一定のパターンを示していたことがわかった。しかし，その内容を考えてみれば年度による4類型の価値意識の高低に違いがみられた。

3．各年度の1年生と3年生の比較

Fig. 5, 6, 7は各年度の1年生と3年生の価値意識のパターンの比較を示した図である。1989年の1年生と3年生では，統計的に有意な差はみられなかったが相対的にすべての価値意識で3年生の方が低い傾向を示している。1990年の1年生と3年生では「アゴン型」の価値意識に5％水準で有

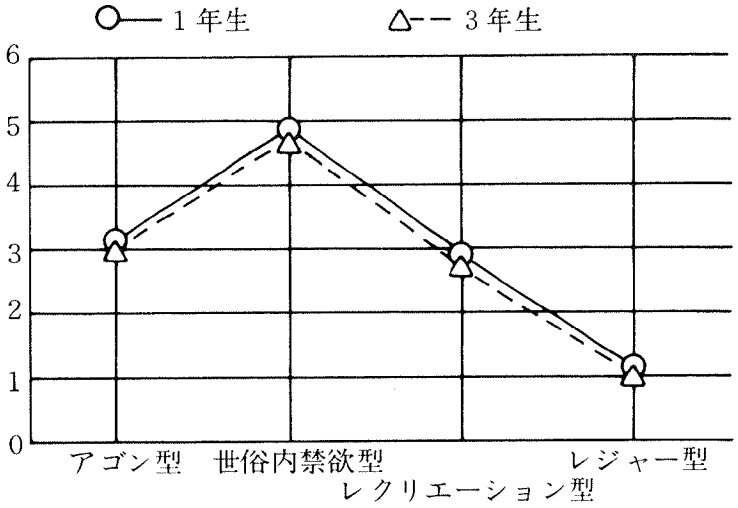

Fig. 5 1989

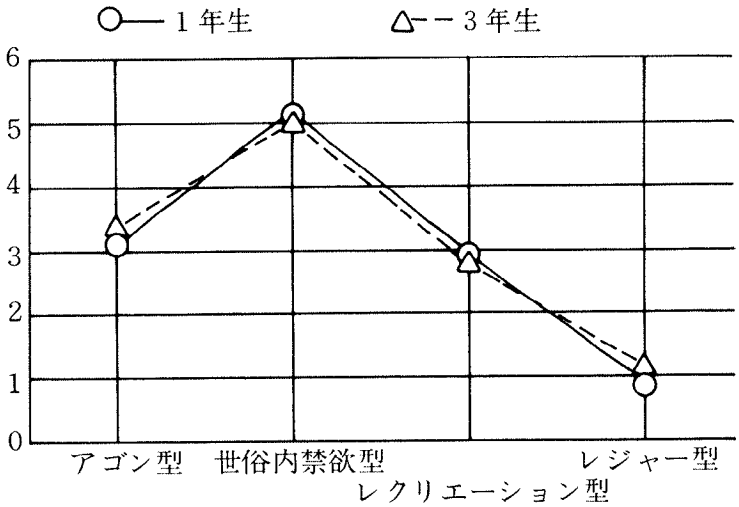

Fig. 6 1990

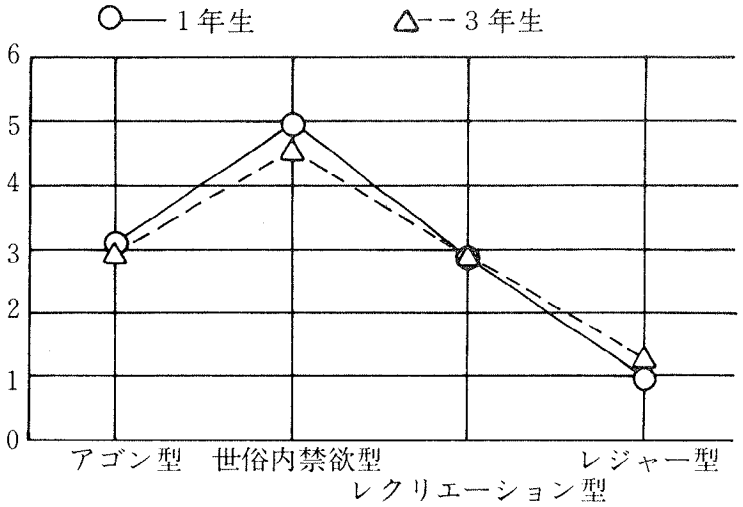

Fig. 6 1991

意な差（1年生に低い傾向）がみられ，それ以外では有意な差はみられなかったが。しかし，3年生の「世俗内禁欲型」の価値意識に低い傾向がみられた。また，1991年の1年生と3年生では，特に「世俗内禁欲型」の価値意識に5％水準で有意な差（3年生が低い傾向）がみられ．そのほかに1年生の「レジャー型」の価値意識に低い傾向がみられた。

以上の結果より，相対的に1年生と3年生には同じ価値意識のパターンがみられた。特に3年間の中で「世俗内禁欲型」の価値意識では1年生よりも3年生に相対的に低い傾向が存在することがわかった。この傾向は1年生と3年生という属性集団の特性であると考えられた。

まとめ

以上の結果及び考察から明らかになったことは以下の通りであった。

1．1989年にK体育大学に入学した1年生が，2年間の大学生活を経過した後，3年生（1991年）の時点で価値意識における「世俗内禁欲型」の低下と「レジャー型」の上昇という変容がみられた。特に女子と一般入学者にその特徴が顕著であり，志向性のレベルでは女子の顕著な禁欲性の低下の傾向がみられた。

2．調査した3年間において1年生と3年生それぞれの価値意識のパターンがほぼ同じ傾向を示した。

3．調査した3年間における1年生と3年生という比較から1年生と3年生では同じ価値意識のパターンを示したが，1年生よりも3年生に「世俗内禁欲型」の価値意識の低下の傾向がみられた。

これらの結果はK体育大学という1体育大学における事例的結果であるが，体育系大学に入学した学生におけるスポーツ価値意識が僅かではあるが大学生活の中で変容していることを示している。また，競技スポーツに対する態度や動機づけに重要と考えられる「世俗内禁欲型」の価値意識が低下し，特に「禁欲性」の志向が低下しているという実態は，体育系大学で競技スポーツにおける競技力向上の可能性に対して問題提起を投げかけていると言える。ただし，本研究では集団の平均的価値意識レベルでの理論展開のため，必ずしも個々の学生レベルでの価値意識の把握がなされたわけではない。特に，著者（1990）は体育専攻学生の中に明確な「世俗内禁欲型」の価値意識を持った集団が存在することを報告している。しかし，一般にスポーツに対する価値意識が多様化しているのも事実であり，この傾向は社会における様々なものに対する価値観の多様化を考えれば当然の成

行きである。また，体育専攻学生の変容（競技的価値意識の低下及びレジャー的価値意識の上昇）は，社会において様々なタイプのスポーツ指導者の養成を期待されている体育系大学においては望ましい傾向なのかも知れない。しかし，明確に競技スポーツの上で良い成績を挙げて行きたいと思っている集団も存在する以上，それらの学生たちの大学における位置づけを明確にしていく必要がでてくると考えられる。

最後に本研究では1体育大学における事例的研究にとどまっているが，大学生活の中でスポーツ価値意識が変容しているという仮設を提示できたと思われる。今後の課題としてどの様な要因によってスポーツ価値意識が変容して行くのかを明らかにしていく必要がある。

注　採用した質問事項は以下の通りである。

1．スポーツで自己の限界に挑戦したい。
2．きびしい練習をしてまでもスポーツをしたくない。
3．どこまでも技術の向上をめざしたい。
4．いつでもやめられる気楽さを持ってスポーツをしたい。
5．きびしい指導を受けてまでもスポーツをしたくない。
6．競技会・大会をめざしてがんばりたい。
7．あそびとしてスポーツを行いたい。
8．目的を持たずに面白さを味わうだけでは，スポーツをする意味がない。
9．スポーツを通して人間形成ができたとしても，それは単なる結果にすぎない。
10．スポーツを通して礼儀・作法を身につかたい。
11．スポーツを生活の気晴らしのひとつとして行いたい。
12．スポーツは何かを得るための手段である。

注2　統計的処理は鹿屋体育大学計算機センターのFACOM MM760／4を使い，SPSS－X統計パッケージで行った。

参考文献

1）浅沼道成：体育専攻学生に関する研究，体育・スポーツ社会学研究9，道和書院，1990，p. 23－39.
2）上杉正幸：大学生のスポーツ価値意識について（5），香川大学教育学部研究報告，Ⅰ－67，1986.
3）上杉正幸：体育教師のスポーツ価値意識，香川大学教育学部研究報告，Ⅰ－69，1987.
4）上杉正幸：スポーツ価値意識のパターンとその規定要因に関する研究，科学研究費補助金（一般研究C）研究報告書，1990.
5）大橋美勝・徳永敏文：日本人のスポーツ観について－多様性とその変化－，体育・スポーツ社会学研究1，道和書院，1982，p. 19－38.
6）日下裕弘・丸山富雄，一般成人のスポーツ観に関する研究，体育・スポーツ社会学研究7，道和書院，1988，p. 131－158.
7）佐伯聰夫：スポーツの文化，「スポーツ社会学の基礎理論」，菅原編，不昧堂，1984，p. 67－98.
8）佐伯聰夫：同上，p. 71.
9）平野稔他：体育専攻学生の生活実態とスポーツ意識についての調査，鹿屋体育大学スポーツ教育研究会，1991.